

自主学習の指針を明確にして 4月から学びのペースをつかむ

山形県 東根市立神町中学校

部活動の忙しさなどから、なかなか家庭学習習慣が定着せず、学習につまずく生徒が見られた東根市立神町中学校。家庭学習の指針となる学習シラバス、学習のペースメーカーとなる単元テストなどを導入し、入学したばかりの生徒に中学校の学びのペースをつかんでもらうことを重視している。

課題

- 学校行事や部活動には意欲的に取り組む一方、落ち着きがなくまとまりに欠ける面も見られる
- 入学直後の導入期に学習習慣を身に付けられず、学習面のつまずきをその後も引きずる生徒が見られる

取り組み内容

- 自主学習の指針となる単元ごとの「学習シラバス」を導入。単元全体を見通しながら学習を進められるようにした
- 学習を進める上でのペースメーカーとなる単元テストを導入
- 自学ノートを友だち同士で見せ合って学び合いを促すなど、終わりの会を活用する
- 学級活動に力を入れて、学級全体で学び合う雰囲気をつくる

成果

- 1年生の早い時期から中学校の学習のペースをつかめるようになった
- 家庭学習が習慣化すると共に、学習方法が定着し、学習内容の質も高まった
- 自学ノートの交流では学び合いが促され、自主学習のレベルが高まった
- 学級全体で学びの意義について共有でき、学び合う雰囲気が生まれた

今後の課題・改善の方向性

- 学力下位層の生徒も学習シラバスを使いこなせるように内容を見直し、個別に指導も行う
- 自主学習の充実を図るため、上級生のノートを見せて、意識向上を促す

School Data

◎1994（平成6）年開校。果樹園や住宅地に囲まれた地域にある。「礼儀正しく、覇気があり、凜とした学校」を目標とし、龍のように勢いのある「龍勢神中」を合い言葉とする。



校長◎大内敏彦先生

生徒数◎398人 学級数◎14学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒999-3737 山形県東根市大字若木 5988

TEL◎0237-48-3375

URL◎<http://www.school-higashine.org/jinmachi-jh/>

公開研究会◎未定

「中学生にする」導入期指導の工夫

**何から勉強すればよいか
学び方が分からない**

サクランボやリンゴなどの果樹栽培が盛んな地域にある東根市立神町^{じんまち}中学校。校区には工業団地や自衛隊駐屯地があり、宅地造成が進んでいることから、県内では人口が増加している地域だ。新旧の住民が入り混じり、地域の環境が安定しないことで、学校に荒れが見られた時期もあった。大内敏彦校長は生徒の様子を次のように語る。

「本校の生徒は意欲が高く、学校行事や部活動に熱心に取り組みますが、落ち着きがない生徒もおり、まとまりにくいこと、また部活動で疲れてしまい学習面がおろそかになりやすいことが課題でした。特に1年生にとって入学直後の数か月は、3年生と一緒に部活動を行うのは体力的に厳しいものです。次第に勉強がおろそかになり、授業が分からなくなるという状態を食い止めた」と考えました」

1年生での学習面のつまずきを後々まで引きずる生徒もいるため、1年生は5月の連休明けまで部活動を1時間早く切り上げて帰宅させている。ただ、それだけで生徒の学習面のつまずきが減るわけではない。

「授業内容の定着には、家庭学習が不可欠です。中学校では、学校から課された宿題に取り組むだけでなく、自主的な学習が求められます。そうした姿勢や習慣は入学直後の意

欲の高い時期から指導を始めることで定着させやすく、この時期を逃すと、生徒は3年間をだらだらと過ごしかねません」（大内校長）

また、学習面でつまずく生徒が抱えている共通の悩みとして「学び方が分からない」ところがあると、大内校長は話す。

「生徒から『家で勉強しようと思っても、何から勉強すればよいのか分からない』という悩みを聞くことができました。そこで、学習習慣の定着が不十分だった生徒も含め、全ての生徒が、自分の理解度に合わせて自主的に学習できるような学びの指針を伝え、少しずつ学習習慣を定着させようと考えました」

学習シラバスと単元テストで 学び方と学習のペースをつかむ

同校が行うのは、学習シラバスと単元テストの組み合わせによる指導だ（P.13 工夫①）。まず入学直後の各教科のオリエンテーションで、授業の受け方や家庭学習の進め方など中学校での学習の基本を説明し、中学生としての学習姿勢を伝える。そして、自主学習を進める上での指針となる学習シラバスを配布する。これは、国立教育政策研究所の山森光陽主任研究官を講師に招いて研修を重ねながら、全教科について単元ごとに学習内容をまとめた独自のものだ。研究主任の田中恵理子先生はこのねらいを次のように話す。

「小学校にはない新たな教科が始まる中で



東根市立神町中学校校長
大内敏彦 Ouchi Toshitiko
「目の前の課題を主体的に捉え、それを解決していく気力と手段を身に付けさせた」



東根市立神町中学校
研究主任。「さまざまな出来事に立ち向かえる意欲と持久力を持つてほしい。生徒と『素』で向かい合う」



東根市立神町中学校
門脇豊光 Katowaki Toyomitsu
1学年主任。「一人ひとりの生徒の良さを伸ばし、将来への夢を持てる生徒を育てたい」



東根市立神町中学校
後藤玲子 Goto Reiko
1学年担任。「生徒の良さを見付け、励まし、勇気付けることで、生徒は自分自身の力で伸びていく」

授業がどんどん進むと、生徒は『自分は付いていけるだろうか』と不安になります。シラバスによって現在の理解度が分かり、『今何を学び、それがどうつながっていくのか』という見通しがつくことで、安心して、学習に集中できるようになります。常に全体を見通しながら学ぶことで理解度も高まると考えます」

学習シラバスを見ながら自主学習を進めるように指導するため、「家で何を勉強すればよいのか分からない」ことも少なくなる。そして、学習シラバスに対応する形で単元終了時に単元テストを実施する。このように学習

シラバスは自主学習の指針となり、単元テストは単元の理解度を測るといふペースメーカーの役割を担うわけだ(図1)。

「中学校では定期考査に向けて計画的に学習を進めることが求められます。初めての経験に上手く対応できない生徒もいますが、単元テストは出題範囲が限られているため対策は比較的容易です。その積み重ねが定期考査の対策にもなるのです」(大内校長)

図1 導入期の活動の流れ

	4月	5月	6月	7月	8月	
学習シラバスの活用	シラバスの活用の仕方について、教科別オリエンテーション	← 各教科の授業と家庭学習でシラバスを活用 →				シラバスの活用について自己評価
単元テスト	← 毎週火曜日の6校時に実施 2教科×25分 →					
学級活動	← 1~2か月に1回、終わりの会に生徒同士で自学ノートを見せ合い参考にする。また、諸テストへの取り組みを振り返る →					
主な行事	<ul style="list-style-type: none"> 入学式 生徒会オリエンテーション 家庭訪問 	<ul style="list-style-type: none"> 中間考査 生徒総会 1年宿泊研修 ボランティア 	<ul style="list-style-type: none"> 期末考査 地区中学校総体 教育相談 	<ul style="list-style-type: none"> 終業式 県中学校総体 	<ul style="list-style-type: none"> 始業式 運動会 	

* 同校の資料を基に編集部で作成

生徒の学び合いを促進する 自学ノートでの交流

家庭学習は自学ノートを用いて行い、毎日ノートを提出する(P.15工夫②)。生徒の自主性を重んじ、取り組む内容は統一していなため、生徒によって内容や取り組み方法にばらつきが生じることもある。そこで、グループでノートを見せ合い、良い点や改善点などをアドバイスし合う機会を設けている。1学年担任の後藤玲子先生は次のように説明する。

「学習の進め方にも、生徒それぞれの個性があります。友だちがどのような家庭学習をしているのかを知り、互いの良いところを取り入れてもらいたいと思います」

教師の指導によってではなく、友だちのノートを見たりアドバイスを受けたりして、自ら「気づく」ことがポイントだ。多くの生徒が、効率的なまとめ方を学んだり、友だちの充実したノートに刺激を受けたりするという。

家庭学習の習慣化などに効果 学力下位層への対応が課題

これらの取り組みは、大きな成果をもたらしている。学習シラバスに関するアンケートで「好きになった教科や嫌いではなくなった教科がある」「ポイントを押さえて学習するようになった」ほぼ毎日勉強するようになった」を肯定する割合が1年生で高い傾向が見

られた。今後もこの指導を継続する考えだ。「学習シラバスは、教師にとっても制作過程が最高の教材研究になり、全体的に授業力が高まっていると感じます。また、学習シラバスと単元テストという一貫した指導と評価のシステムを導入することで、生徒も教師もふれずに学び、指導できるようになってきました。新学習指導要領の全面实施に向けてのよい準備にもなりました」(大内校長)

自学ノートの交流は「皆で協力して勉強を頑張ろう」という学び合いの雰囲気を生み、学級づくりにも大きな役割を果たしている。また、学習意欲にも変化が見られるという。

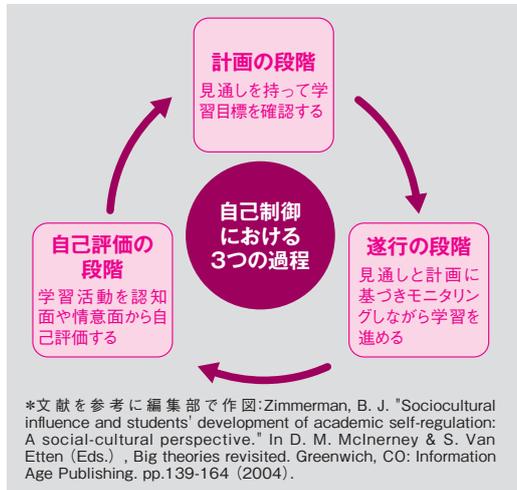
「特に学力中位層の生徒が学力上位層の生徒から刺激を受け、ノートをまねしたり、家庭学習に積極的に取り組んだりするようになりました。ノートの見せ合いを介して、人間関係の深まりも見られます」(後藤先生)

課題は、学力下位層の生徒が学習シラバスを使いこなせていないことだ。内容の見直しと共に、生徒によっては個別指導も考えている。また、自学ノートでは、上級生の自学ノートを見せて学力上位層の意識向上を促すなど新たな試みを検討している。こうした指導改革を教師全員が参加して進めていく考えだ。

「校長が1人で変えようとしても学校は変わっていきません。学校全体で変えていくというムードをつくり、生徒の力を伸ばしていきたいと思います」(大内校長)

「中学生にする」導入期指導の工夫

図2 自己制御学習理論



工夫① 学習シラバスと単元テストによる学習習慣の定着

3ステップの要素がある
学習シラバスと単元テスト

どの学力層の生徒にも学習習慣が定着するようにと始めたのが、学習シラバスと単元テストだ（P.14図3）。この2つは「自己制御学習理論」に基づいて作成されている（図2）。自己制御学習理論は、①計画の段階、②遂行の段階、③自己評価の段階で構成される。それを同校の取り組みに当てはめると次のようになる。

①その単元を学習すると、何が出来るようになるのかが分かる

②学習事項を身に付けたかどうかを知るために、また、不十分だったところをしつかり身に付けるために、家庭ではどのような学習に取り組みばよいかを考える

③学習事項が定着したか、また定着に向けて努力できたか、改善点はどこかを自己評価する

学習シラバスで単元全体を見通した上で自分で計画を立てて学習し、その成果を学習シラバスの理解度チェック欄や単元テストによって評価する。このサイクルを通じて自律して学習する力を付けていくというわけだ。

1年生の導入期は
自己肯定感の醸成に重点

学習シラバスと単元テストは3年間を通して取り入れているが、学年によって目的は異なる。1年生では「学習すれば出来るようになる」という自己肯定感が学習習慣の定着に結び付くという考えから、学習シラバスの内容に合わせて、漢字や英単語、重要語句に関する出題がされる。そのねらいを1学年主任の門脇豊光先生は次のように説明する。

「単元テストは、きちんと復習すれば誰でも高得点を出せる内容にしています。目標を

80点など高めに設定し、それを上回ることで次も頑張ろうという意欲を引き出すためです。目標点を下回った場合は、再テストをしてしっかりと定着させます」

1年生の早い時期に自主学習への意欲を高めると共に、中学生の学習ペースに慣れさせる。そして、2年生の単元テストでは段階的に応用的な問題を、3年生の単元テストでは受験対策になるような問題を出题する。

学習シラバスの内容は教科や単元によって異なる。数学の場合は「この問題が解けますか」と、単元の最終的な目標となる問題を示すことがある。それにより、生徒に見通しを持たせて、問題を解きたいという気持ちを授業への意欲に結び付ける。

理科の場合は、実験結果などを先に示すと関心が低下するおそれがあるため、空欄などにして作成する。導入を工夫したい単元では、授業を1、2時間行つてから学習シラバスを配布したり、発展的な内容として補助資料や発展資料などを掲載したりすることもある。

今後、学習シラバスを通じて、保護者との連携を強化する考えだ。学習内容や評価項目について伝え、ゆくゆくは家庭学習を支援してもらえればと期待している。

図3 学習シラバスと単元テスト 1学年社会の例

学習シラバス

組 番 氏名		第1学年社会シラバスNo.1 【地理単元1 世界の姿をとらえよう】		理解度チェック 学習した90	対応ページ	
時間	授業日	内 容	重要 語 句	家庭学習 ワーク	地理教科 書	
1	/	授業でがんばろう ☆六つの大陸と三つの大洋をながめてみよう ・地図帳を使って、大陸と大洋を調べてみよう。	◎世界地図に書き込もう。	ABC	p2~3	p6~7p
2	/	☆旅行してみたい国をさがそう ・地図帳を使って、たくさん国の名前と位置を調べよう。	中華人民共和国 ロシア連邦 イギリス オーストラリア フランス エジプト アメリカ合衆国 カナダ ブラジル インド オセアニア州 アジア州 アフリカ州 ヨーロッパ州 北アメリカ州 南アメリカ州	ABC	p2~3	p8~9
3	/	☆いろいろな国の面積を調べよう ・統計資料を使って、面積の大きい国を第5位まで調べよう。 ・世界で一番小さい国を、地図帳で探そう。	1位ロシア連邦 2位カナダ 3位アメリカ合衆国 4位中華人民共和国 5位ブラジル 6位オーストラリア 世界で一番小さい国 →バチカン市国	ABC	p4	p10~11
4	/	☆いろいろな国の国境線を調べよう ・地図帳を使って、国境線がどのような地形になっているか調べよう。 ・アフリカ州に直線の国境線が多いのはなぜか。	国境線 内陸国 島国 ・国境線は川、山脈、湖などがもともになっている。	ABC	p5	p12~13
5	/	☆緯度と経度を使って、国の位置を確かめよう ・緯度と経度を理解しよう。 ・国や都市の位置を説明しよう。	緯度 緯線 赤道 北緯 南緯 経度 経線 本初子午線 日付変更線 東経 西経	ABC	p6	p14~15
6	/	☆緯度の違いで何がかわるか調べよう ・緯度が違うと、季節が違うことを理解しよう。	北極圏の夏→白夜 日本が夏の時、オーストラリアのメルボルンの季節は何か。	ABC	p6	p16~17
7	/	☆経度の違いで何がかわるか調べよう ・時差を求めよう。	標準時 時差 日付変更線	ABC	p7	p18~19
8	/	☆地球儀と世界地図の違いに気づこう ・地球儀と世界地図で、ニューヨークでの最短コースを考えてみよう。 ・様々な世界地図の使い方に気づこう		ABC	p8	p20~21
9	/	☆世界の略地図を書こう ・様々な略地図の書き方に挑戦しよう		ABC	p8-9	p22~23
			◎単元のまとめをしよう		p10~13	

内容・重要語句

単元の学習の流れを示すことで見通しを持って授業に臨むことができ、家庭での学習の指針にもなる

理解度チェック

その日の学習内容が理解できたかの自己評価を通して、計画的に学習状況を振り返る習慣を身に付けさせる

家庭学習・対応ページ

理解が不十分な時に、どこを復習し、どの資料を参考にすればよいのかが分かるようになっていく

単元テストの結果

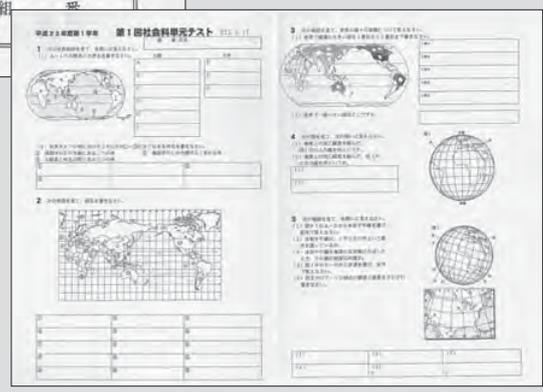
単元テストは、学習内容の確実な定着を図るための1つの評価で、指導改善の一助となるもの。生徒にとっては日々の家庭学習の目標になり、学習習慣のペースづくりにもつながる

単元全体を振り返って	自己評価(ABC)
・意欲的に、資料集や地図を使って調べることができましたか。	()
・自分の考えをまとめたり、発表することができましたか。	()
・資料集や地図帳をうまく使うことができましたか。	()
・新しい語句や国名を覚えることができましたか。	()
感想	

単元テストの結果

氏名

単元テスト



単元全体を振り返って・感想
学習内容の定着に向けて努力が出来たのか、
情面からの自己内省を行う

1年生の単元テストは、「やればできる」という自信と学習意欲を高めるために基本的な学習内容を
を出題している

* 同校の資料をそのまま掲載

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第4回

「中学生にする」導入期指導の工夫

工夫② 自学ノートの交流や学級活動で学び合いを促す

自学ノートの交流で 家庭学習の質が向上

生徒の学び合いによって家庭学習の質を高める目的で、1〜2か月に1回実施するのが自学ノートの交流だ。帰りの短学活で20分程度行う。定期考査の2週間前など、特に家庭学習に力を入れてほしい時に行うことが多い。

交流の流れは次の通りだ。まず生徒は4、5人のグループをつくり、互いの自学ノートを見せ合い、良い点や課題など気付いたことを付せんに書いてそれぞれノートの表紙の裏に貼る（写真1）。時間がある時は、友だちのコメントを踏まえ、今後の改善策などをまとめたり、他のグループのノートを見たりすることもある（写真2）。

付せんに書かれるコメントは、「色を使っているが見やすい」「もつと字を小さくすればたくさん書ける」「きれいにまとめられていて、まねをしたいと思います」などさまざまだ。「他の生徒がどのようにノートを使っているかは気になるものですが、普段、見る機会はありません。学力層にかかわらず、友だちの上手なノートに刺激を受けているようです。『私も毎日きちんと提出しなければ』と、



写真1 言葉を変えながらお互いのノートにコメントを書いた付せんに貼る。皆に見られるという緊張感から、おのずと自学ノートのまとめ方も丁寧になるという



写真2 全体的に友だちのノートの良さについて肯定的なコメントが多い。この日は最後に友だちのコメントを踏まえて自分の自学ノートの改善点をまとめた

積極的に自学ノートを提出するようになった生徒もいます」（後藤先生）

交流を続けるうちに、目に見えてノートのまとめ方が上手になっていく生徒も多い。単に学習内容をまとめるだけでなく、その内容を基に問題を自作する生徒が現れた時には、その学習方法が他の生徒に広がっていったこともある。

自学ノートの内容から、一人ひとりの学習に対する姿勢や意欲も把握できると、門脇先生は話す。

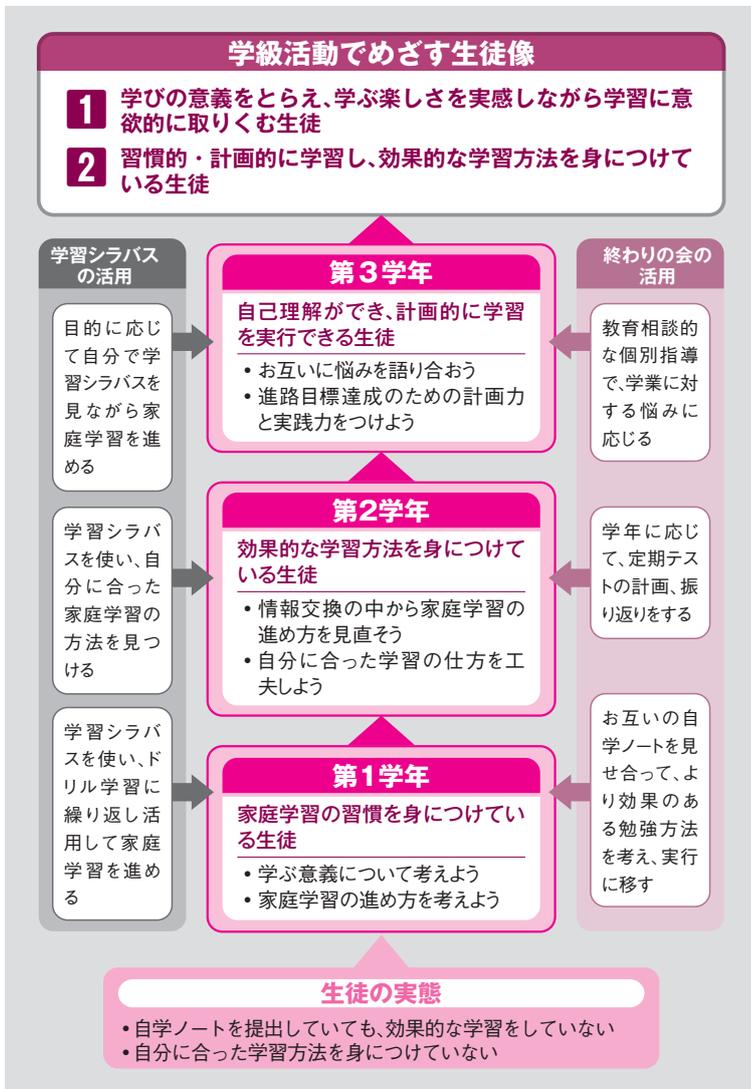
「生徒一人ひとりの良さや課題が見えてきて、その後の指導にも生かされます」

同校では学級や学年の集団づくりに力を入れていますが、学び合いを促す自学ノートの交流はその点にもよい影響をもたらしている。

「生徒の学習の意欲には個人差があり、1人でペースをつかみ、学習していくことが難しい生徒もいます。集団から刺激を受けると同時に、自分の進め方を振り返る場になってほしいと思います」（後藤先生）

「1人で取り組むのは難しくても、皆と一

図4 学業指導にかかわる学活全体構想計画



学びの意味を皆で考えて 学び合いのある学級をつくる

学級活動では、「学びの意義をとらえ、学ぶ楽しさを実感しながら学習に意欲的に取りくむ生徒」「習慣的・計画的に学習し、効果的な学習方法を身につけている生徒」を目指す生徒像としている(図4)。

この目標に向けて、学びについて学級全体で考える活動も行う。11年度の1年生では、「なぜ、わたしたちは学ぶのだろう」をテーマに、学ぶことに対する意識や関心の程度を振り返った。保護者や祖父母などに学びの必要性についてインタビューをしてまとめ、グループで話し合いをしたが、社会に出ている大人にインタビューをすることによって、中学校だけではなく、その先を見据えて学びの重要性について考えた生徒が多かったようだ。生徒は次のような感想を述べている。「勉強は大事だと思ったのはいつか」とい

大内校長が考える校長の役割

中学校3年間で「大人になったら何か良いことが待っている。自分は幸せになれるはずだ」という将来に期待を持ち、未来を切り開いていくエネルギーに満ちた生徒に育ててほしいと思います。生徒一人ひとりが自己実現を図るための学力を保障することは、校長としての責務の1つです。学習シラバスや単元テストの取り組みを導入期から取り入れ継続することで、生徒に学び方と学習のペースをつかんでもらい、自学自習の出来る生徒を育てたいと考えています。また、学習や部活動、行事を通して、自分一人ではなく、チームで取り組んで皆で成し遂げる大切さも伝えていきたいと思っています。

う質問に対して『社会に出て気付いた』という答えが返ってきて、『なるほどな』と思った。勉強は社会に出るためには大事なのだと思います「将来の夢をはっきりと決めていないので、これから探していこうと考えてました。自分のしたい仕事を見つけて、その仕事に活用できるように勉強を頑張ろうと思いました」

こうした学級活動を通して、一人ひとりが学びの意義を理解し、また学び合いのある学級集団をつくり上げることで、相乗的な効果が表れることを期待している。